

中東複合危機から第三次世界大戦へ

イスラームの悲劇

山内昌之著 (PHP 新書・820 円 + 税)



組みに真正面から挑戦する状態。一方、中東では「アラブの春」以降、IS など非国家勢力が「ポストモダン型戦争」を戦う「中東複合危機」が進行する。ポストモダン型戦争とは、自由・人権、市民社会、国民国家などのモダン(近代)原理を否定し、カリフ制やイスラム法の表現といったプレモダン(前近代)統

治を主張する IS が世界各地でテロを起こす状況だ。著者は今後、世界がローマ法王フランシスコのいう「まとまりのない第三次世界大戦」に突入する危険があると説く。本書はこれらの仮説に基づき、イスラームの誕生からイラン・サウジアラビアの国交断絶、トルコによるロシア軍機撃墜まで、中東をめぐる多くの現象を一つ一つ丁寧に解説している。紛争当事国・諸勢力の思惑や行動原理に関する記述は質・量ともに必要にして十分。学生・一般社会人

だけでなく、評者のような中東政治をある程度知る者にとっても、実に読み応えのある一冊である。特記すべきは、本書が過激派に対し批判的ながらも、イスラームに対する敬意と愛着に満ちていることだ。欧州での極右運動や米国のトランプ旋風に示されるように、近年欧米キリスト教社会ではイスラーム排斥の声が高まっている。本書はこうした偏見・誤解を排し、バランスのとれた形でイスラームの本質を説いている。内容的には重く複雑なので、週末など時間のあるときに、じっくりと一気に読み切ることをお勧めしたい。

物騒な題名だが、内容は濃厚だ。著者は国際関係史が専門の歴史学者で、わが国における中東・イスラーム研究の第一人者でもある。その著者の欧州・中東に関する豊富な知識と文明史・宗教史に対する鋭い視点で書かれた本書には、21世紀の現代史の流れを体感するための地政学的ヒントが数多く含まれている。

評者が理解する山内氏の大局観はこうだ。ロシアのクリミア併合以後「第二次冷戦」

が始まる。第二次冷戦とは、中露やイランのようにイデオロギーでなく独裁・権威主義に基づく国家群が、米欧中心の国際政治経済・国際法の枠

現代史の行方占う知見を提供

評・宮家邦彦

(キヤノングローバル戦略研究所研究主幹)